

『国立国語研究所論集』投稿・執筆要領

2021年6月9日改正

国立国語研究所論集編集委員会

1. 刊行

国立国語研究所（以下、「研究所」という。）における研究活動の活性化と成果の公表及び所内若手研究者育成を目的として、『国立国語研究所論集』（英語名“NINJAL Research Papers”）を各年度に2回（原則として、7月と1月）オンライン版で発行する。

2. 投稿資格

投稿時に次のいずれかに該当する者とする。ただし、共著の場合は第1著者が次のいずれかに該当すればよい。

(1) 研究所の研究教育職員

(2) 研究所の客員教員，非常勤研究員・プロジェクト研究員，外来研究員，共同研究プロジェクトに参画している共同研究員（非常勤研究員・プロジェクト研究員の場合は，参画している共同研究プロジェクトのリーダー，所属部署の代表者，受入担当者のいずれかに，外来研究員の場合は受入教員に，共同研究員の場合は参画している共同研究プロジェクトのリーダーに，それぞれ相談の上，投稿すること。）

(3) 研究所の名誉教授

(4) その他，国立国語研究所論集編集委員会（以下、「編集委員会」という。）が認めた者

（注）上記(1)(2)に該当する者が退職または任期終了した場合は，その後5年間は投稿資格を有するものとする。ただし，年度途中の退職または任期終了は，その年度末に発生したものとみなす。

3. 投稿時期

投稿原稿の締切は，毎年3月，6月，9月，12月の各10日とする。

4. 論文内容

(1) 投稿は未公開のオリジナルな原稿に限る。他誌に投稿中の原稿は投稿できない。

(2) 研究所の設置目的に沿う内容なら，理論・記述・調査・実験等の手法や分析の枠組みは問わない。ただし，「2. 投稿資格」の(2)に該当する者が投稿する場合は，内容は研究所在職中の研究内容・成果に関するものに限る。

(3) 研究所の研究教育職員及び非常勤研究員・プロジェクト研究員が投稿する場合は，原則としてNINJALサロンで発表し，そこでの指摘を反映させた原稿とする。また，論文の内容が，共同研究プロジェクトの研究内容及び研究成果である場合は，そのことを明示するために，論文の謝辞の中に「本稿（の一部）は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「〇〇〇〇」（プロジェクトリーダー：〇〇□□）の研究成果である。」という内容の一文を入れること。

(4) 共同研究員が投稿する場合は，原則として，参画している共同研究プロジェクトの研究発表会で発表し，そこでの指摘を反映させた原稿とする。また，論文の内容は，共同研究プロジェクトの

研究内容及び研究成果であることとし、そのことを明示するために、論文の謝辞の中に「本稿（の一部）は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「〇〇〇〇」（プロジェクトリーダー：〇〇〇〇）の研究成果である。」という内容の一文を入れること。

- (5) 外来研究員が投稿する場合は、論文の内容は、滞在期間中の研究題目に関する研究内容及び研究成果であること。また、そのことを明示するために、論文の謝辞の中に「本稿（の一部）は筆者が〇〇〇〇年〇〇月～〇〇〇〇年〇〇月まで国立国語研究所に外来研究員として滞在した際の研究テーマ「～」の研究成果である。」という内容の一文を入れること。
- (6) 研究の中間報告、既発表論文のデータ補足的な報告も可とする。

5. 原稿のカテゴリー

「論文」のみとし、研究ノートや書評紹介は含めない。

6. 原稿の書式等

- (1) 使用言語は、日本語、英語のいずれかとする。
- (2) 日本語の場合は、原稿は A4 判横書き、43 字×36 行で作成する（マージン上下左右 2.5cm，フォント 10.5 ポイント。句読点は、引用部分を含めて原則として全角の「，」と「。」を統一的に使用する）。（編集委員会が認めた場合に限り縦書きも可。A4 判縦書き、30 字×24 行×2 段。句読点は原則として全角の「，」と「。」を統一的に使用する） 原稿の分量は、図、表、文献、要旨等を含め、原則として、30 ページ以内とする。
- (3) 英語の場合は、原稿は A4 判またはレターサイズで、図表や例文を含まない 1 ページが約 550 語になるように書式を調整した上で作成する。原稿の分量は、図、表、文献、要旨等を含め、原則として、30 ページ以内とする。
- (4) 原稿中の図・画像・グラフなどについては、白黒で掲載する。ただし、どうしてもカラーにする必要があると編集委員会が判断したものは、カラーで掲載することができる。その場合、色覚の多様性に十分配慮し、カラーでも白黒でも分かりやすい図の作成を心がけること。
- (5) 原稿は以下の順序、体裁で整え、合わせて 1 つのファイルとし、すべてのページに通し番号をつける。なお、母語でない言語で執筆する際のネイティブ・チェックは著者の責任において行うこと。

- ・ 本文の使用言語による「論文名（副題も含む）、著者名、所属・職名、要旨、キーワード」

- ・ 論文本体 注は、通し番号をつけ、論文末にまとめて記載するか、注を付けた各ページに脚注として記載する。なお、引用のためだけの注は付けない。

- ・ 参考文献

- ・ 別言語による「論文名（副題も含む）、著者名、所属・職名、要旨、キーワード」

- ※要 旨：日本語（20 行以内）と英語（250 語以内）の両方の要旨を付ける。

- ※キーワード：日本語と英語の両方で、それぞれ最大 5 個のキーワードを付ける。

- (6) 例文の提示の仕方、参考文献の書き方等の書式は、本文書の末尾に付けた「付録」の書式等の詳細を遵守すること。
- (7) 原稿で使用・解説したデータを関連データとして原稿と併せて投稿することができる。
- (8) 関連データの形式は、原則として、テキストファイル、エクセルファイル（マクロなし）、PDF

ファイルのいずれかとし、1原稿につき最大3件、合計のファイルサイズは10MBまでとする。

- (9) 関連データには、(a)データの名称、(b)作成者名、(c)概要（日本語：100字～150字程度、英語：50語～75語程度）を日本語と英語で記述したものを別ファイルとして付けること。また、必要に応じて、凡例、データの説明や使用上の注意事項等を記した **readme** ファイルを付けることもできる。**readme** ファイルは論文本体と同じ言語で書く。
- (10) 関連データは原則としてクリエイティブ・コモンズのライセンスで公開する。詳細は本文書の末尾に付けた「付録」の「4. 関連データのライセンス」を参照のこと。

7. 原稿及び関連データ提出方法

- (1) 投稿原稿及び関連データは、郵送または電子メールで編集委員会に提出すること。なお、投稿原稿及び関連データは原則として返却しない。
- (2) 投稿原稿を郵送する場合は鮮明に印刷された原稿を3部提出する。関連データを郵送する場合は、CD-R等の電子媒体に格納して提出する。投稿原稿を電子メールで送付する場合は、「6. 原稿の書式等」の(5)「論文名、著者名、所属・職名、要旨、キーワード」（日本語と英語の両方）及び「論文本体、参照文献」を合わせて1つのファイルとし、すべてのページに通し番号を付け、WORDとPDFの両方のファイルをメール添付で提出する。関連データがある場合は、「関連データの概要」（日本語と英語の両方）を添えて、投稿原稿といっしょに提出する。必要に応じて、**readme** ファイルを付けることもできる。
- (3) 原稿を提出する際は、所定の様式の送付状を添えること。原稿送付状の様式は、研究所ホームページ (<https://www.ninjal.ac.jp/publication/papers/>) からダウンロードし、郵送の場合はプリントアウトを、メール投稿の場合はファイルをメール添付で提出する。

【投稿先・問い合わせ先】

国立国語研究所論集編集委員会

〒190-8561 東京都立川市緑町10-2

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所

投 稿 先 E-mail: papers-submission[at]ninjal.ac.jp

問い合わせ先 E-mail: papers[at]ninjal.ac.jp

※[at]を@に変えてください。

【提出物】

・投稿原稿（WordファイルとPDFファイルの両方） ※郵送する場合は印刷原稿3部

・原稿送付状（Wordファイル）

原稿と併せて以下を投稿することができる。 ※郵送する場合はCD-R等に格納

・関連データ（形式は、原則として、テキストファイル、エクセルファイル（マクロなし）、PDFファイルのいずれか。1原稿につき最大3件、合計のファイルサイズは10MBまで）

・関連データの概要（(a)データの名称、(b)作成者名、(c)概要、を日本語と英語の両方で記述したファイル）

・必要に応じて、**readme** ファイル（論文本体と同じ言語で記述）を付けることもできる。

8. 著作権

著者は、原稿を投稿する際に、以下を承諾したものとする。

- ・ 個々の論文の著作権は著者に帰属する。
- ・ 著者は、論文の複製権と公衆送信権の行使を研究所に許諾する。
- ・ その他「国立国語研究所における編集著作物の取扱いについて」に定められている事項。

なお、他の著作物に掲載された図版の転載等にかかわる著作権処理、及びデータの利用・公開にかかわる関係者の許諾取得は、著者の責任において行うこと。

9. 採否

原稿の採否は、編集委員会が査読の上、決定する。

10. 校正

著者による校正は、原則として初校のみとする。訂正は誤植に限るものとし、内容の変更は認めない。なお、採用決定後、体裁や書式について編集委員会から著者に修正を求める（あるいは編集委員会の判断で書式の細部を変更する）ことがある。

11. 稿料

稿料は払わない。

付録：書式等の詳細，図表等の色使い，関連データのライセンス

1. 特殊文字ならびに日本語のローマ字化

造字を要する特殊文字は，必要不可欠の場合を除き，避ける。日本語のローマ字化は，原則として，ひとつの方式（例えば，訓令式，ヘボン式）を統一的に使用する。

2. 例文表記

例文と本文の間は1行空ける。例文には丸括弧で通し番号を付け，字下げせずに左揃えとする。例文を再掲する場合，元の例文番号をそのまま記載するのではなく，論文全体における通し番号とする。その際，例えば「(11)=(4)」のように元の番号を示す。なお，本文では，通し番号のみで言及すればよい。

執筆言語と異なる言語の例文には，必要に応じて，単語ごと（場合によっては形態素ごと）にグロスを，そして全文の訳を以下のいずれかの方法に準じて付ける。また，使用する略語は別途説明する。

(1) *ba naashnish.*

for.him I.work

‘I work for him.’

(2) *b-a naa-sh-nish.*

3OBJ-BEN ADV-1SG.SUBJ-work

‘I work for him.’

(3) *b-a naa-sh-nish.*

3 目的 -受益 副詞 -1 単主語 -働く

「私は彼のために働く。」

(4) *Hanako wa imooto to eiga o mi-ta.*

Hanako TOP sister with movie ACC see-PAST

‘Hanako saw a movie with her sister.’

3. 注および参考文献，例文出典

注は通し番号を付け，論文末にまとめて記載する。または，注を付けた各ページにそれぞれ注内容を記載する脚注としてもよい。なお，引用のためだけの注は付けない。

参考文献は，本文または注において引用または言及されたもののみを，次の形式に従って論文末にまとめて記載する。また，該当する場合は，例文出典を論文末にまとめて記載する。参考文献の形式に準拠し，出版地：出版社を記載する。

- a. 参考文献は，第1著者のアルファベット順または五十音順に並べる。参考文献の記述言語が複数ある場合は，言語ごとに分けて並べてもよい。
- b. 同一著者の文献は発表年の順に並べる。
- c. 同一著者の同一年の文献には a, b, c などの添字を付ける。
- d. 同一の単行本から複数の論文が引用されている場合には，単行本を編者名による1つの項目として立て，各論文はそこへの参照とする。
- e. 著（編）者名は，N. S. Trubetzkoy, R. H. Robins のように慣例的な場合を除き，フルネームを使用し，イニシャルを用いない。
- f. 各項には，著（編）者名，発行年，論文名，頁等を以下（句読点も含む）に準じて記載する。

[雑誌論文] 第1 著者名・他の著者名 (発行年)「論文名」『雑誌名』巻数: 頁数. (巻全体で通しの頁番号が打たれている場合は巻数だけで、号数は不要。号ごとに頁番号が付けられている場合のみ、巻数と号数を記す。)

例 佐久間鼎 (1941) 「構文と文脈」『言語研究』 9: 1-16.

例 服部四郎 (1976) 「上代日本語の母音体系と母音調和」『言語』 5(6): 2-14.

例 Postal, Paul (1970) On the surface verb “remind”. *Linguistic Inquiry* 1: 37-120.

例 Kay, Paul and Chad K. McDaniel (1978) The linguistic significance of basic color terms. *Language* 54: 610-646.

[論文集などに所収の論文] 第1 著者名・他の著者名 (発行年)「論文名」編者名 (編)『論文集名』頁数. 出版地: 出版社.

例 上野善道 (1997) 「複合名詞から見た日本語諸方言のアクセント」国広哲弥・廣瀬肇・河野守夫 (編)『アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』231-270. 東京: 三省堂.

例 Kiparsky, Paul (1968) Linguistic universals and linguistic change. In: Emmon Bach and Robert T. Harms (eds.) *Universals in linguistic theory*, 171-202. New York: Holt, Rinehart and Winston.

[単行本] 第1 著者名・他の著者名 (発行年) 書名. (必要な場合は) 版, (該当する場合は) シリーズのタイトルと巻号. 出版地: 出版社.

例 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』東京: 大修館書店.

例 林四郎・南不二男 (編) (1974) 『世界の敬語』, 敬語講座第8巻. 東京: 明治書院.

例 Haegeman, Liliane (1994) *Introduction to government and binding theory*. Second edition. Oxford: Basil Blackwell.

例 Jakobson, Roman, Gunnar Fant and Morris Halle (1963) *Preliminaries to speech analysis: The distinctive features and their correlates*. Cambridge, MA: MIT Press.

[学位論文] 著者名 (提出年)「論文名」学位論文の種類, 大学名.

例 南西太郎 (2005) 「南西語音韻論研究」博士論文, 南西大学.

例 Sag, Ivan (1976) Deletion and logical form. Unpublished doctoral dissertation, MIT.

[インターネット上の資料] 資料題名, サイト名 URL (資料にアクセスした日)

(必要に応じて, web ページの公開日や更新日を記載してもよい。)

例 総務省統計局「平成20年住宅・土地統計調査速報集計」

<http://www.stat.go.jp/data/jyutaku/2008/10.htm> (2009年7月28日発表。2012年6月1日参照)

例 独立行政法人国立国語研究所日本語教育基盤情報センター学習項目グループ・評価基準グループ(2009)『「生活のための日本語: 全国調査」結果報告<速報版>』.

http://www.ninjal.ac.jp/products/nihongo-syllabus/research/pdf/seika_sokuhou.pdf (2010年6月1日参照)

例 国立国語研究所 (2016) 『日本語歴史コーパス』 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/> (2016年10月26日確認)

例 Répertoire International des Sources Musicales Collection (RISM Collection). <http://www.rism.info/> (accessed December 2013).

例 Frellesvig, Bjarke, Stephen Wright Horn, Kerri L. Russell, and Peter Sells. *The Oxford Corpus of Old Japanese*. <http://vsarpj.orinst.ox.ac.uk/corpus/ojcorpus.html> (accessed December 2013).

- ・欧文の著書・論文名は、それぞれ項目の頭文字（および固有名詞）のみを大文字とする。（ただし、ドイツ語の名詞のように慣例的に頭文字を大文字にするものは、それに従う。）
- ・邦文で執筆された単行本、論文を欧文論文で引用する場合は、上記の欧文文献の表記に準ずることとする。また、書名、論文名に訳語をつける場合は、以下の書式に従う。

例 Yamada, Yoshio (1908) *Nihon bunpoo-ron*. [*Japanese grammar*]. Tokyo: Hoobunkan.

例 Kibe, Nobuko (2008) *Naiteki henka ni yoru hoogen no tanjoo*. [The birth of a new variety caused by internal change]. In: Takashi Kobayashi (ed.) *Hoogen no keisei [Dialect formation]*, 43–81. Tokyo: Iwanami Shoten.

以下にアルファベット順に配列した例を示す。

参考文献

Bloomfield, Leonard (1933) *Language*. New York: Holt.

Haegeman, Liliane (1994) *Introduction to government and binding theory*. Second edition. Oxford: Basil Blackwell.

服部四郎 (1976) 「上代日本語の母音体系と母音調和」『言語』 5(6): 2–14.

Jakobson, Roman, Gunnar Fant and Morris Halle (1963) *Preliminaries to speech analysis: The distinctive features and their correlates*. Cambridge, MA: MIT Press.

金田一京助 (1932) 『国語音韻論』東京：刀江書院。

Kiparsky, Paul (1968) Linguistic universals and linguistic change. In: Emmon Bach and Robert T. Harms (eds.) *Universals in linguistic theory*, 171–202. New York: Holt, Rinehart and Winston.

Lakoff, George (1986a) *Women, fire and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago: University of Chicago Press.

Lakoff, George (1986b) *Cognitive semantics*. Berkeley Cognitive Science Report 36.

Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.

南西太郎 (2005) 「南西語音韻論研究」博士論文，南西大学。

Postal, Paul (1970) On the surface verb “remind”. *Linguistic Inquiry* 1: 37–120.

Sag, Ivan (1976) Deletion and logical form. Unpublished doctoral dissertation, MIT.

佐久間鼎 (1941) 「構文と文脈」『言語研究』 9: 1–16.

柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』東京：大修館書店。

Trubetzkoy, N.S. (1971) *Grundzüge der Phonologie*. 5. Auflage. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

上野善道 (1997) 「複合名詞から見た日本語諸方言のアクセント」国広哲弥・廣瀬肇・河野守夫 (編)『アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』 231–270. 東京：三省堂。

- ・本文および注における参考文献への言及は以下の要領に準じて行う。必要に応じて著者名をフルネームで記してもよい。

例 この問題については、山田孝雄（1908）も論じているように……

例 山田（1908: 584）は、「助詞は単独にては何等の観念をもあらはし得ず、他の観念語に附属して始めて其の義を認むるを得るのみ」と言う。

例 鈴木（1979: 40–53）は、一回的な過去の出来事を叙述する動的述語のシタの用法を……

例 Sapir (1925) notes that...

例 Bloomfield (1933: 347) remarks as follows: “The assumption that the simplest classification of observed facts is the true one, is common to all sciences . . .”

例 In Optimality Theory (Prince and Smolensky 1993, Kager 1999), ...

例 ... as often mentioned in the literature (Chomsky 1980, 1990, Bresnan 1990, 1991, Hale 1996).

4. 図表等の色使いについて

図・画像・グラフは白黒（の濃淡）で作成する。円グラフや帯グラフなどにおける各領域の区別は明度の差が明確になるようにすること。また、模様（パターン）を併用することも推奨される。どうしてもカラーにする必要があると編集委員会が判断した場合はカラーを使うことができる。その場合、以下の点に留意すること。

- a. 白黒で印字してみても（つまり色の違いがなくても）、濃淡のコントラストだけで識別が容易かどうか確認すること。
- b. 赤と緑、黄色と黄緑、青と紫など識別が難しいことがある組み合わせは必要がない限り使わない。
- c. 色以外の情報（書体、線の形状、記号の使用など）も合わせて使う。
- d. 色名に言及する場合は他の情報と組み合わせる。例えば、「～は緑色の線で示した」ではなく、「～は緑色の点線で示した」などのようにする。

5. 関連データのライセンス

原則として、以下のクリエイティブ・コモンズのライセンスのいずれかを著者が指定する。なお、関連データに第三者の著作物が含まれる場合は、投稿の前に該当するライセンスについての許諾を得ていること。

ライセンス	原作者表示	改変	再配布	商業利用
CC BY	必須	可	可	可
CC BY SA	必須	可（ただし、同じライセンスで公開）	可	可
CC BY ND	必須	不可	可	可
CC BY NC	必須	可	可	不可
CC BY NC SA	必須	可（ただし、同じライセンスで公開）	可	不可
CC BY NC ND	必須	不可	可	不可